

現状と課題

県内の出産をとりまく状況

- ◇出産できる施設の高知市とその周辺への集中
 - ・県内の分娩を取扱う施設は9施設（6病院、3診療所）と限られており、このうち6施設が央保健医療圏に集中している※分娩取扱い休止施設除く
 - ※安芸保健医療圏（1病院）、高幡保健医療圏（0）、幡多保健医療圏（1病院・1診療所）
- ・特に経産婦では分娩が急速に進んだ場合等に自宅分娩や救急車等での車中分娩により、母子の命も危険にさらされている

- ◇救急隊員の分娩徴候への対応力の強化
 - ・救急車内等で陣痛や出血、破水等の妊産婦と新生児への対応が必要



課題

- 居住地に近い所に分娩取扱い施設がない圏域では、高知市とその周辺の施設で妊婦健診、出産を行っている
- 産科医療施設から離れた地域に居住している妊婦には、産科症状の際にすぐに対応できる医療機関までのアクセスが遠く、心理的にも不安を抱えている
- 産科疾患の搬送や救急対応は全救急搬送においても少数の事例であり、救急救命士等においても、対応に不安を抱えている方もいる

総合周産期母子医療センター（高知医療センター）が独自に実施したBLSO研修（H28）受講者数と県から高知医療センターに委託して実施したこれまでのBLSO研修受講者数

職種	H28	H29		H30	R元		R5	R6	計
		10/1	1/21	2/16	9/29	2/9			
救急救命士	22名	15名	16名	17名	18名	17名	17名	19名	141名
救急医・助産師等	13名	3名	2名	1名	0名	0名	1名	5名	25名
合計	35名	18名	18名	18名	18名	17名	18名	24名	166名

R2～4年度：新型コロナウイルス感染症の影響により未実施

BLSOとは？

- ◆病院前の産科救急的対応をはじめ、日頃は産科医療に関与していないが、車中分娩や病院外での妊産婦救急に突然遭遇する可能性がある救急救命士や救急医、家庭医、看護師等の方々を対象とした実践的なプログラム（研修内容）
 - ・妊婦の評価方法（週数の推定、分娩経過の観察、妊娠中の女性の出血や腹痛の評価など）、分娩介助、新生児蘇生、妊婦蘇生等についての講義と実技等
 - ・1日間 ※1グループ6名
 - ・筆記試験、マネキンによる実技試験

※この研修については、NPO法人周産期医療支援機構が、ALS0-Japan事業として運営を実施

令和6年度の取り組み実績

- ◆研修実施機関：高知県・高知市病院企業団立高知医療センター
- ◆開催日時：令和6年11月2日（土）
- ◆開催内容：BLSOプロバイダーコース
 - 講義&少人数グループによるワークステーションで妊婦の評価、分娩介助、分娩第3期の処置、肩甲難産、産後大出血の対応、新生児の処置・蘇生法、車中分娩などを実践
- ◆受講申込者：24名（当初定員18名⇒24名に増）
 - <職種内訳> 救急救命士 19名、医師2名、看護師1名、その他2名
 - <消防機関別内訳(18名)> 安芸保健医療圏内の消防機関所属 3名
中央保健医療圏内の消防機関所属 11名
高幡保健医療圏内の消防機関所属 1名
幡多保健医療圏内の消防機関所属 3名

令和7年度の取り組み予定

- ◆研修実施機関：高知県・高知市病院企業団立高知医療センター
- ◆開催内容・回数：BLSOプロバイダーコース 2回
- ◆受講定員者：計24名(1回12名予定)

【参考】

妊産婦救急救命基礎研修受講者のアンケート結果

※令和6年度受講者を対象に受講後アンケート実施。回答者21名（回答率88%）。



☆研修に対する満足度

- ①満足 18名（86%）
- ②やや満足 3名（14%）
- ③ふつう 0名（0%）
- ④やや不満 0名（0%）
- ⑤不満 0名（0%）

☆これまで妊産婦の搬送にかかわったことがあるか

- ①ある 11名（52%）
- ②ない 10名（48%）

☆日々の業務において、当該研修を受講する必要性を感じるか

- ①感じる 21名（100%）
- ②感じない 0名（0%）

<感じると回答した主な理由>

☆主な研修受講動機

- ・症例が少なく、経験がないため
- ・日々の救急活動の中で不安を感じていたため
- ・産科対応病院まで1時間以上かかるため、知識・技術を身に付け、対応できるようになるため
- ・緊急度、重症度の判断を速く確実にできるようにするため
- ・所属の医療機関には産婦人科・小児科がなく、いざというときに対応できるスキルを身に付けるため

- ・症例が少ないからこそ研修等で身につける必要がある
- ・学ぶ機会が少ないため
- ・知っていることで助かる命があるため
- ・医療機関までの搬送に長時間を要するため